

第2章 授業で勝負する

第3節 論理力を育てる

OECD Programme for International Student Assessment、通称PISAの学力が世界標準の学力となり、現行学習指導要領はPISA型学力を強く意識して改訂施行されました。今回は、PISA型学力の根幹である「論理的思考力」「論理力」を取り上げます。

この節は、

■今なぜ論理力なのか■

■論理力とは■

■論理力を育てる■

の3つの項から成っています。

■今なぜ論理力なのか■

PISA（OECD生徒の学習到達度調査）2003年調査で日本の順位が下がり、「ゆとり」から「学力」への流れが一気に進んだ。

PISA調査は、学校のカリキュラムをどの程度習得しているかを評価するものではなく、「知識や経験をもとに、自らの将来の生活に関する課題を積極的に考え、知識や技能を活用する能力があるか」をみるもので、「学校の教科で扱われる知識の習得を超えた部分まで評価しようとする」ものである。つまり、PISA的学力は、「実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるか」を評価するものである。

それが、2007年度から始まった全国学力テスト、2011年改訂学習指導要領に色濃く反映されている。こうしたPISA学力との関連で、「論理力」や「論理的思考力」といったものが注目されるようになった。

ところで、なぜPISA学力なのか。ここでは、佐藤学さん(東京大学)の「21世紀型の学校」を紹介することで、設問に対する答えとしたい。

1989年にベルリンの壁が崩壊し、経済のグローバル化が進行した。その結果、先進諸国では産業主義社会からポスト産業主義社会へと移行して労働市場が大きく変貌し、生産労働に従事する労働人口が激減し、知識情報産業の労働市場(情報、経営、金融)と対人サービスの労働市場(福祉、医療、教育、文化)が飛躍的に拡大している。この変化に対応して、知識が高度化し複合化し流動化しており、学校教育は生涯学習の基礎として、将来にわたって学び続ける基礎教養を形成し、学びの主体としての学習者を育てる必要に迫られており、創造的な思考や探求を行い、他者と協同するコミュニケーション能力を育てることを要請されている。

「21世紀型の学校」は、「質と平等の同時追求」(草尾注:「質と平等の同時追求」については、第4節で詳述する。)を根本原理として構想されている。産業主義によって経済発展を遂げている途上国の教育改革は今なお「量」の達成(草尾注:「量」は従来のテストで測れる知識量のこと)が中心目的であるが、ポスト産業主義社会に突入している先進諸国の教育改革においては、「質と平等の同時追求」が教育改革の成否を規定する根本原理となっている。この根本原理を最も端的に示したのが、OECDによって2000年から3年ごとに実施されてきた国際学力調査(PISA調査)であった。

(岩波ブックレット『学校を改革する』より)

佐藤さんの文章は、専門書でなくても結構難しい。簡単に言うところだ。

経済構造の変化によって、知識をたくさん持っている「学力」ではなく、「創造的な思考や探求を行い、他者と協同するコミュニケーション能力」をもった「学力」を要請するようになった。先進諸国の教育改革は今まさにその方向で進んでおり、その達成度を測るのがPISAテストだというわけである。

いつの時代もそうなのだが、その時代の経済が求める人材が教育の有り様を規定してきた。知識詰め込みが間違いで、PISA型学力が正しいというのではない。今の経済がPISAを求めているということだ。

PISA型読解力という言葉がある。そのPISA型読解力を育てるために、論理的に書かれた文章(説明文)を教材に、従来の読み取りに加えて「熟考」「評価」といったレベルの学習が展開されている。ここで育てようとしている力こそが、「論理力」なのだ。したがって、「今なぜ論理力か」という問いに対する解は、

教育

なぜPISAかの説明と全て重なる。

参考までに、朝日新聞(2011.6.1)の記事を紹介しておこう。記事の最後で、シュライヒャー氏が日本の教育の課題として、「授業を先生中心から生徒中心に変えることだ」と指摘している。これは佐藤氏の提言と完全に重なる。詳細は第4節に譲る。

問題解決能力を測る ■日本は生徒の意欲向上を

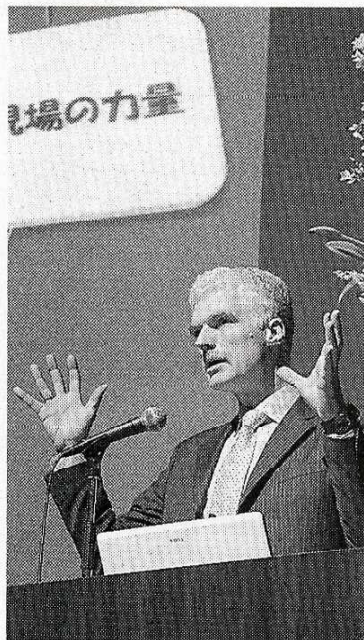
これからの子どもに求められる「力」は何か。PISAは何をめざすのか。PISAを統括する経済協力開発機構(OECD)事務総長教育政策特別顧問のアンドレア・シュライヒャー氏(46)の講演とインタビュアーから読み解く。

PISA統括のOECD顧問

シュライヒャー氏に聞く

シュライヒャー氏はこの春来日し、東京都内で講演。写真、河合博司撮影。その後、朝日新聞の単独インタビュアーに応じた。

PISAの目的は「学校で何を学んだか」ではなく、「どう問題解決できるか」を測ることだと、シュライヒャー氏



は説く。覚えたことを単に再生するのは、コンピューターの方が得意だ。インターネットで検索すれば、「答え」は何千、何万と出てくる。その中で何を選び、信じるか。自ら判断する「問題解決能力」の必要性が上がっている、という。「もう一つ必要なのは

対人関係能力だが、残念ながらPISAでは測れない」

教育に投資すれば、その国家は長い目で見れば投資を上回る経済的利益を受ける、と氏は強調する。「特に、少子化して一人一人の生産性向上が必要な、日本のような国にとっては重要なことだ」

しかし、世界標準の尺度を導入することで、教育の画一化やランク付けが起きる弊害はないだろうか。「PISAが物事を動かしているのではない。世界中の需要や状況に合わせてPISAができたのだ」と氏は答えた。「グローバル化が進み、社会に出てから必要とされる力は世界中で画一化した」

そして、「目的はランク付けではない。他国を見て学

び、自国の弱点を知ることには主眼がある」と強調した。

しかし、グローバル化すれば、いい人材はいい仕事のある国に移り住む。結果的に国と国の格差が広がるのではないかと氏はこう答えた。

「そういう考え方もある。しかし逆に、例えばアフリカに良い人材がいれば企業の方が動いていく。長い目で見ればそういう時代が来る」

最後に聞いてみた。日本の教育の課題は何だと思えますか? 「一人一人の生徒が学びへのモチベーションを上げることがだ。前より向上したが、他国よりまだ低い」と氏は指摘した。「そのためには、授業を先生中心から生徒中心に変えることだ」(聞き手・吉田美智子、今村優莉)

■論理力とは■

「論理的思考力」(ロジカルシンキング)とは、簡単に言うと「筋道立てて考える力」だと理解してきた。それで間違いではないのだと思うが、次の一文が示唆に富んでいる。京都市立新道小学校(平成23年度末で閉校)の「平成19年度校内研究の概要」を紹介しよう。

「論理的思考」と「論理的表現」を区別して

前年度、それぞれの学年の実践の中で、明確な定義付けを行わないままにはあるが、どんな指導・活動が「論理的思考」を高め発揮させることになるのかを試行錯誤的に追求していった。

その結果、かなり具体的な指導・活動の姿が浮かび上がってきた。しかも、学年ごとにそれぞれの学年の発達年齢に相応した内容となっていた。

そこで、今後もしできる限り具体的な実践の中から、「論理的思考」を高める指導・活動を追求し、残り2年間の研究の中で、それらを系統化・体系化し、新道小学校における「論理的思考」を高める指導・活動が、全学年の総合・生活・国語の学習を通してどのように展開されていくのか、一覧できるようにしていきたいと考えた。

ただし、これまで我々は、「論理的思考」という言葉を、「筋道立てて考える」とか、「～だから～だなどと理由を付けて説明できる力」とか、あいまいではあるが、簡単に言えば、科学・学問的な論文に見られるような、「理路整然とした思考ができること」というイメージで語ってきた。(下線は草尾。以下同様)

しかし、研究の過程に於いて、我々は以下のことに気づかされた。まず、①「論理的思考」と「論理」はまったく違うものであり、はっきりと区別されなければならないと言うこと。その上に立って、②我々がこれまで「論理的思考」と考えてきたことは、すべて「論理」もしくは「論理的であること」であり、それは「論理的思考」の結果としての、言わば「論理的表現」(文章・口頭による説明)であるということ。そして、③「論理的思考」そのものは、その「論理的表現」を達成するための試行錯誤も含めた様々な探求作業だと言うこと。この「論理的思考」において重要なのは、「探す」「問う」「吟味する」「選択する」ことである。それは、集めた情報はもちろん自分自身の仮定や探求活動の仕方そのものを批判的に「問い」、「吟味し」、「探し」、「選択」していく作業過程である。

したがって、「論理的思考」段階では、一方で、「分析・分類・条件統制・比較・関係づけ」といった整然とした作業が必要だが、他方で、自らの活動・作業・進む方向などを常に批判的に吟味し「問い」続けることが不可欠である。

したがって、今後の研究では、結果としての「論理的表現」とそこに至る「論理的思考」とを明確に分けて、実践上も「論理的表現」の達成を指導者はもちろん児童もはっきりと目標として意識し、その目標につながる「論理的思考」のとりくみ（指導・活動）を創造していきたい。

「論理的思考・表現」の定義化としての「論理力の17要素」

一昨年度以来、「論理的思考」をキーワードとして研究・実践を深めてきた。そして、昨年度は、積み上げた実践をもとに、「論理的思考」と「論理的表現」とを明確に区別し、研究・実践を整理した。この間、上述のように「できる限り具体的な実践の中から、「論理的思考」を高める指導・活動を追求」ということで、あえて論理的思考・表現の定義付けの議論は保留してきた。しかし、この2年間の論理的思考・表現を高める実践を踏まえ、それを分析的に振り返り、一覧表（「論理的思考・表現と活動」低・中・高）として整理する中で、あらためて論理的思考・表現を定義化する必要性が出てきた。

この2年間の実践は、どの学年の取り組みを見ても、結果として、子どもたちの論理的思考・表現を鍛え高めるものであったことは明白である。しかし、では、具体的にどのような力を伸ばし育ててきたのかと問われたとき、「論理的思考・表現を育ててきた」というだけでは、抽象的に過ぎ、具体性を欠く。それでは、今後において、子どもたちの具体的な活動や作業レベルで、どんな力を発揮させ育てていくのか、意識的に組み立てていくことができない。この「論理的思考・表現」を、もっと具体性のある分節化された要素として定義していかなければならないのである。

そこで、昨年度末の研究の総括の中で、広島県安芸高田市立向原小学校の研究を参考に、本校のこれまでの実践を踏まえつつ、論理的思考・表現を『論理力』の17要素に分節化し、より厳密な定義を試みた。この現段階での試案は別表（『論理力』の17の要素」「論理力』の17の要素・学年系統」）を参照。また、この「論理力」の17要素を昨年度の実践に適用したのが、別表「論理的思考・表現と活動低・中・高」である。

そして、今年度、論理的思考・表現の力を「論理力の17要素」として具体化し、意識的に各要素に定義された力を育て高める実践のあり方を研究していくこととなる。

以上のような方向で、研究主題に迫っていくのであるが、そもそも、私たちが

「論理力」の17要素・学年系統

17要素	定義	重点
① 対話する力★	相手との対話の中で、さまざまな思考・表現を駆使し、新たな情報や課題を引き出す力。	低学年
② 発想する力	思いつく力	
③ 比較する力	複数のことがらを対置させ、その共通点や相違点を列挙していく力	
④ 分類する力	複数のことがらがある共通項に基づいていくつかの組に分ける力	
⑤ 定義する力★	一つ一つの物事・現象を、明確な言葉で表現する力。そのために、辞書や図鑑などの正しい情報を活用する力。	
⑥ 計画する力★	課題解決に向けて、段取りを立てたり計画を作成したりする力。	
⑦ 記録する力★	既存しない情報を、自分で掘り起こして、粘り強く記録する力。	
⑧ 収集する力★	本・インターネット・インタビューなどで、必要な情報を粘り強く集める力。	
⑨ 選択する力☆	相手・目的・場面に応じて、適切なものを選び出す力	
⑩ 説明する力	考えの根拠やことがらの内容を明確に表す力	
⑪ 分析する力	あるものごとを分解して、それを成立させている成分・要素・側面を明らかにしていく力	中学年
⑫ 検討する力	ある観点から詳しく調べ、その特徴を明らかにする力	
⑬ 推論する力☆	個別に存在しているものの中から、共通項(同一性)を識別し、規則性を発見したり、規則性を他のケースに当てはめたりする力	
⑭ 説得する力	相手の理解を深め、納得させる力	
⑮ 評価する力 (※批判的思考)	そこに表されていることが果たして現実に照らし合わせて適当なものであるかどうかの適合性について判定する力(本当にそうかな?と見直す力)	高学年
⑯ 構成する力	複数の要素を組み立ててあるものを作り出す力	
⑰ 論証する力	一つのことごとを課題として提起し、次にその解決のための考え(仮説)を出し、さらにその正しさを調べてみる。(検証・実験・調査)という順序で論を進めていく力	

※広島県安芸高田市立向原小学校の研究を基礎に。

★印は、本校独自設定。☆印は、本校で改訂。

対話	相手との対話の中で、さまざまな思考・表現を駆使し、新たな情報や課題を引き出す力。
発想	思いつく力
探求	自ら計画し段取りを立て、自ら動いて情報を記録・収集していく力。
理解	文章・図表・画像などの様々な情報に表された内容を読解する力
判断	内容の真偽性や考えの筋道の妥当性について判断する力
表現	事実や考えを、筋道立てて表現する力

論理的思考・表現をキーワードとして進めてきたのは、総合的な学習の時間にしっかりとした力を身につけんがためであった。そのためにこそ、他教科(とりわ

け国語科)との関連も図ってきた。その結果、育てるべき力を「問題解決能力」,
「論理的思考能力」,「論理的思考・表現の力」と深めてきた。そして、いまあら
ためて確認できるのは、こうした力は、総合的な学習固有のものではなく、国語
力と大いに連動する学力そのものであることだ。つまり、私たちとしては、総合
的な学習を教科の学習と同じく、学力を鍛え育てる場と考えてきたのである。そ
うした趣旨を確認する意味で、今年度の研究主題・サブテーマの表現を以下のよ
うに改訂することにした。また、「問題解決能力」は「論理的思考・表現の力」
を核としたものとして理解でき、内容的に重複することも踏まえ、その言葉を省
き、学力を鍛え育てる総合的な学習という点を強調した。

私が広島県・向原小学校の「論理科」を知ったのも同じころである。「論理力
というのは、説明する力、説得する力、構成する力、論証する力、比較する力、
分類する力、分析する力、評価する力、選択する力、推論する力、構想する力、
発想する力の総称である。説明する力、説得する力、構成する力、論証する力は、
国語科を中心に身につけさせるものであり、それ以外の力は他教科の学習に位置
づけて指導することになる。」と、そのころの文章にまとめている。新道小学校
の研究はさらに1歩前進させ、分かりやすく整理されている。重点学年と要素を
手がかりに、各教科・領域に位置づけていけばよい。

■論理力を育てる■

論理力を構成する要素の中で、説明する力、説得する力、構成する力、論証す
る力は、国語科を中心に身につけさせるものだと先に書いた。そのことを意識し
て実践した記録を紹介したい。(文章は、各年度校内研究紀要原稿)

■2010年度■

5年の実践

読解力を育てるキーワードは「論理力」

5年担任 草尾佳秀

1 はじめに

PISA型読解力を強く意識した新学習指導要領の実施を来春に控えた今、国

語科の授業風景も大きく変わらざるを得ない。それは端的に言えば、「情緒的な読みから論理的な読みへ」ということになる。もちろん心田を耕すごとき授業も必要だが、私たちの喫緊の課題は、論理的な文章の読みに正面から向き合うことだ。

ここで言う「読解力」は、テキストを正確に読み取るという意味ではない。正確に読み取った上で、自分なりの意見を持ち、その意見を論理的に発信する一連の学びを「読解力」と呼んでいる。つまり、読解力を育てるとするのは、論理力を育てるということに他ならない。

2 具体的な取り組み

(1) スキルをツールに

① 読解のためのスキルを育てる

ロールプレイゲームに興じている子どもが、手に入れたより高度なツールを駆使して、難局を打開していく。――この光景が、読解の「スキル」を駆使して文章を読み解いていく姿と重なる。「スキル」という表現をしているのは、その力そのものを目的とするのではなく(この段階では、子どもの力は情報を取り出し解釈するレベルにとどまる)、ロールプレイゲームを有利に進めるツールを手に入れるように、より高次の学習(つまり熟考・評価のレベル)のためのツールとして獲得させたい力と位置づけるからである。

5月に「文章の読み取り達人への道」という授業を組んで、既習の読解スキルの復習を行った。スキルを系統化することで、子どもの中にバラバラにあった力が1本に繋がったように感じる。それを踏まえて、読解力プリントを断続的に家庭学習に課した。

② 論理力のスキルを育てる

論理力というのは、説明する力、説得する力、構成する力、論証する力、比較する力、分類する力、分析する力、評価する力、選択する力、推論する力、構想する力等の総称である。説明する力、説得する力、構成する力、論証する力は、国語科を中心に身につけさせるものであり、それ以外の力は他教科の学習に位置づけて指導することになる。

毎日の1分間スピーチを、論理的な表現力を育てる取り組みとして位置づけた。最初はワークシートで話型を示し、それに沿って原稿を書かせた。そうすることで、説明・説得・構成力の基礎ができていくと考えた。同時に、論理的な話し方のコツを教えた。聞き手にもポイントを絞った評価カードを用意し、意識化に努めた。年度途中からは、原稿なしでもまとまりのあるスピーチができるようになってきている。

算数では、文章題を四マス関係図に図式化し、立式する方法を採り入れ、繰り返

返し定着を図ってきた。問題文を読んで、分かっている数と尋ねられていることに下線を付す。次に、それを四マス図に表現する。必要な情報を取り出し、構成することで問題が可視化され、単純な計算問題に変身する。これによって、ほとんどの子が文章題を苦しなくなった。

(2) 校内研究授業

① 単元名 要旨をとらえよう 「サクラソウとトラマルハナバチ」

② 目標

○筆者の意見を主体的にとらえ、それに対する自分の考えをもつ。

【関心・意欲・態度】

○文章構成を把握し、内容を的確に読み取り、文章全体の要旨をとらえる。

【読むこと】

○文章の要旨から読み取れる筆者の考えを踏まえ、それに対する自分の考えをもつ。【読むこと】

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語事項
○筆者の意見を主体的にとらえ、それに対する自分の考えを明確にしようとしている。		○文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえている。(イ) ○文章構成や文末表現などに着目して筆者の意見を押さえ、それに対する自分の意見を持っている。(エ)	○問題提起、問題の解明、まとめという文章構成を理解している。(オ)

③ 指導について

○ この時期の児童は、知的探求心が格段に発達してくる。なぞがあれば、それを解く意欲をもったり、解かれる過程に興味をもったりし、解けた爽快感もこれまで以上に感じるようになる。「サクラソウとトラマルハナバチ」は、サクラソウの絶滅の危機という事象の裏に隠されているなぞを、明快に解き明かしている。この文章を読むことによって、事象の裏に隠されているなぞを解明していくことのおもしろさを実感させたい。

本教材は、「問題提示」→「問題解明Ⅰ」→「問題解明Ⅱ」→「まとめ」という構成になっている。「問題解明Ⅰ」に基づいて「問題解明Ⅱ」が展開され、それぞれには小さな問いと小さなまとめが示されている。そして、「まとめ」の中に、「問題解明」のまとめに加えて「筆者の考え」が明示されている。そういったことにも着目させ、読む力をつけることを通して、論理的な思考力を育てるのに適した文章だと言える。

筆者は、サクラソウとトラマルハナバチの共生・共進化を題材に、絶滅の危機にあるサクラソウを救うには、環境全体を大きな視野で見、守っていくことが必要だと述べている。この学習を通して、物事を関係性に

おいてとらえるという見方・考え方に気づかせたい。

- 本学級の児童は、落ち着いた態度でまじめに学習に取り組み、学習意欲も高い。朝の読書活動や帰りの会のスピーチ活動も定着しており、子どもたちの言語活動環境は極めて良好である。意見発表もよくするが、友だちの発言に反論したり討論したりする力には弱さが見られる。

読みの学習については、表現に即して文章を読み取る、文章を短くまとめる、筆者の考えと具体例を区別する等の力が不十分な子もいる。一斉学習と一人学習を交互に行う螺旋型のていねいな読みの授業を組織することで、子どもたちのスキル力アップを図り、同時に学び合う楽しさを体感させたい。

- 読解力(読み解く力)とは、文章から書かれていることをとらえ、自分なりの言葉で表現する力である。本単元の読みの目標にはこの両者が含まれる。この内、筆者の考えを読み取り、要旨をまとめるところまでを次のステップで指導し、各過程で必要なスキルの定着をめざしたい。

①段落ごとに要点を1文でまとめる。

- ・文の役割を考え、内容をまとめる。
- ・中心文を見つける。
 - ・中心語句を見つける。
 - ・文と文の関係から中心となる1文を見つけ、傍線を引く。
- ・選んだ1文をもとに大事な言葉を選んでつなげ、要点を1文にまとめる。
- ・文末は常体にする。
- ・指示語部分は文中の言葉を補う。

②段落相互の関係から、文章構成をとらえる。

- ・それぞれの段落の要点をもとに文章構成図をかく。

③中心段落の要点をもとに要旨をまとめる。

- ・段落相互の力関係を考えて、中心段落を取り出す。
- ・指定された字数に注意して、中心語句を使って要旨をまとめる。

④ 指導計画(全8時間)

次	時	主な学習活動	評価規準	評価方法
一	1	○教材文を読んで、学習の見通しをもつ。	○説明文に興味をもって読み、初めて知ったことを進んで発表し、これからの学習の見通しをもとうとしている。【関心・意欲・態度】	ノート 観察
二	2	○文章のおおまかな構成をとらえる。	○問題提示文と、対応するまとめの文を指摘できる。【読む】 ○文章全体を4つに分け、それぞれの内容をとらえている。【読む】	ワークシート発 言 観察
	3	○段落ごとの要点を押さえる。	○要点のまとめ方を理解し、段落ごとに要点を1文にまとめている【読む】	ワークシート発 言
	4	○第2～6段落を読んで、1つ目の問題について考える。	○サクラソウの受粉の仕組みと、トラマルハナバチが果たしている役割をとらえている。【読む】	ワークシート発 言
	5	○第7～9段落を読んで、2つ目の問題について考える。	○トラマルハナバチがいなくなった秘密を、その1年間の生活からとらえてい	ワークシート発 言

			る。【読む】	
	6	○文章構成図を作り、文章全体をとらえる。	○文章構成図をかき、文章全体のつながりをとらえている。【読む】	ワークシート
	7 本 時	○第10段落の内容から要旨をまとめる。	○筆者の主張は何かを考え、要旨をまとめている。【読む】	ワークシート 発言
三	8	○筆者の主張に対する自分の考えを明らかにする。	○筆者の考えと関連づけて、自分の考えを、なぜそう考えたかという根拠とともに書いたり発言したりしている。【読む】	ワークシート 発言

⑤ 本時案

a 目標

○筆者の主張は何かを考え、要旨をまとめることができる。

b 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
1 学習課題をつかむ		
「サクラソウとトラマルハナバチ」の要旨をまとめよう		
2 題名を使って、問いの文を作る	・文章全体が答えとなるような問いの文を作らせることで、読みの視点を明確にする。	
3 筆者の考えを推論する。 (1) サクラソウとトラマルハナバチのつながりをまとめる (2) 筆者の主張を予想して書く	・第3文の「このように」が、第1文と第2文を受けていることを押さえる。 ・第3文と第4文から、筆者の主張を「…なければならぬのです。」の形にまとめさせる。	・本論から筆者の考えを推論し、自分なりにまとめている。(ワーク・発言)
4 要旨をまとめる。 (1) 要旨をまとめるためのキーワードを3つ挙げる (2) 要旨を書く	・第3文から第5文に目を向けさせる。 ・キーワードは ・生き物 ・つながり(つながり合っている) ・全体を守る ・必ずキーワードを全部使って、一文で書かせる。	・キーワードとなる言葉を考え、的確な要旨の文を書いている。(ワーク・発言)

⑥ まとめ

○ 「要旨」の説明と「問いの文を作る」活動に時間を要してしまい、授業の後半が窮屈になってしまった。「要旨を書く」というメインの活動が時間外の課

題になったのは大きな反省点だが、子どもたちの要旨文は概ね評価できるものであった。

- 子どもたちは、本単元の学習を通して、5月から取り組んできた読解学習の自信を深めることができた。

3 終わりに

実践の中から見えてきた今後の課題として、次の諸点が挙げられる。

- 論理的文章を読むスキルをきちんと定着させること。
- 情報リテラシーの段階的指導を確立すること。
 - ・ 図書利用のスキル
 - ・ インターネット検索のスキル
 - ・ 資料選択、評価のスキル
 - ・ 資料活用のスキル
 - ・ プレゼンテーションのスキル etc.
- 論理的な文章表現力を系統的に指導すること。
- 論理力を構成する諸要素を各教科の学習に位置づけること。

■ 2011年度 ■

6年の実践

続・読解力を育てるキーワードは「論理力」

6年担任 草尾佳秀

1 はじめに

5年生からの持ち上がりである今年度の実践は、昨年度の成果と課題を踏まえた「続編」になる。昨年度の取り組みが始まる時、「読解力」とは正確に読み取った上で自分なりの意見を持ち、その意見を論理的に発信する一連の学びであると定義した。つまり、読解力を育てるというのは、論理力を育てるということに他ならないと考えた。そうした考えに立って、「読解のためのスキルを育てる」「論理力のスキルを育てる」ことに重点を置いて実践を重ねた。2年目となる今年度は、読み取った上で「自分なりの意見を持ち、その意見を論理的に発信する」ことに実践のウェイトをシフトさせていく段階である。

2 具体的な取り組み

(1) 論理的に発信する力を

- ① 日常的トレーニングの場としての1分間スピーチ

毎日の1分間スピーチを論理的な表現力を育てる場として位置づけた。理由を添えて話す2つの基本話型に加えて、意見発表の話型、新聞紹介等の伝聞・紹介の話型などをスピーチの「型」として教えた。そうすることでスピーチの題材が広がり、論理力の中心的な要素である説明・説得・構成力の基礎が日常的にトレーニングされると考えた。新聞記事か図書の紹介は、スピーチの題材の中心になっていった。副次的に、子どもたちの目を社会に向けさせることになった。11月の全校スピーチでは、話型の1部を他学年にも紹介した。

② 国語科で「説明する力、説得する力、構成する力、論証する力」を鍛える

論理力の中で説明する力、説得する力、構成する力、論証する力は、国語科が中心に身につけさせるものである。

5月の説明文教材「イースター島にはなぜ森林がないのか」では、説得力をもたせるために筆者はどのように論理展開しているか(どのように文章構成しているか)を学んだ。また、6月教材「新聞の投書を読み比べよう」では、説得力のある文章の書き方に視点を当てた。さらに9月教材「資料を活用して書こう」では、資料を活用した論理的文章を書く練習をした。

そうした学習を集約する位置づけで、「未来に生かす自然のエネルギー」がある。

(2) 校内研究授業

① 単元名 「持続可能な社会」への取り組みについて調べよう

教材名 「未来に生かす自然のエネルギー」牛山泉作

(東京書籍 小学校6年下)

② 目標

- エネルギー問題に関心を持って読み、必要な情報を得るために進んで複数の資料で調べようとする。【関心・意欲・態度】
- 資料の示し方や具体例の挙げ方に注意して、文章と資料を関連させながら読み、筆者の意見を読み取る。【読むこと】
- 調べたことをもとにして、資料や情報を活用してリーフレットにまとめる。【書くこと】

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書くこと	読むこと	言語事項
○エネルギー問題に関心を持って読み、必要な情報を得るために進んで複数の資料で調べようとしている。	○考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理している。(1)	○目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを	○自分の課題を解決するために意見を述べた文章や解説の文章などを利用している。(2)イ

	ア) ○引用したり、図表や グラフなどを用いた りして、自分の考え が伝わるように書い ている。〈(1)エ〉	明確にしながら読ん でいる。〈(1)ウ〉 ○目的に応じて、複数 の本や文章などを選 んで比べて読んでい る。〈(1)カ〉
--	---	---

③ 指導について

- 「読解力」には2つの側面がある。「文章・作品を正確に読み取る力」と「文章・作品に対する感想・批評を形成する力」である。これまで前者の力が強調され、後者の力を育てる取り組みが弱かった。文章を読むことは、その文章に対する自分の意見を持つことであるという意識改革。――これが授業改善の第1のポイントになる。

学習指導要領は、「思考力とは、言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力」だとしている。論理的思考力とは、「意見・結果を、その理由・根拠とのつながりを明確にしながら考える力」である。論理的文章を学習材として論理的思考力を育てるという明確な目的意識。――これが授業改善の第2のポイントになる。

- 本單元における中心的なねらいは、資料の示し方や具体例の挙げ方に注意して、筆者の意見を読み取ることである。そして、目的や方法に合った調べ方を考え、いろいろな資料や情報源の特徴を知ったうえで適切に活用し、複数の資料から分かることを関係づけることによって、問題に対する考えを深めることにある。

児童は、これまでの環境学習や東日本大震災とその後の電力問題から、地球温暖化や身の回りのエネルギー問題に関心を持ち、エネルギーの必要性と大切さに気付き、省エネに取り組む意識が育ってきている。

筆者が取り上げている問題と、意見の述べ方の工夫を読みとり、それを踏まえて、自分が興味を持った課題について複数の資料や情報を参照しながら調べ、まとめることができることを目指したい。

- 本学級では、論理力を育てることを大きな目標に掲げて意図的に活動を組んできた。とりわけ、1分間スピーチは論理的な話し方を習得する場と位置づけ、「話型」として子どもたちに定着している。

説明文の読みの学習については、説明文の文章構成をつかんだり、意見と事実を区別したりすることなどは概ねできるようになっている。しかし一方では、表現に即して文章を読み取る、文章を短くまとめる等の学力差が大きくなってきているのも事実である。個別の学習支援に留意しながら、すべての子どもが文章に対する自分の意見を持てるレベルまで引き上げたい。

- 本単元の最終目標は、説得力のある(効果的な)論理的文章が書けるようになることである。前半の読み取りは、児童の意欲喚起と具体的な方法習得の役割を担っている。そういう位置づけで前半の指導に当たりたい。

①文章構成図を積極的に活用して一人読みを支援する。

- ・序論(話題提示)→本論(説明)→結論(まとめ)という文章構成は、これまで学習してきた説明文の典型的な型である。この型を示して一人読みを支援することで、課題に沿って資料を読むという後半の学習が円滑に進むと考える。(こうした一人読みの力こそ、卒業までに付けたい力だ。)

②図やグラフの有効性を実感させる。

- ・連続型テキストと非連続型テキストの補完関係を確認させたい。どういう場面でどういう資料が使われているか、言い換えると、読み手を納得させるための筆者の「説明の技」を押さえ、リーフレット作りに生かしていく。(非連続型テキストを自在に扱えることは、PISA型学力の重要な一部分でもある。)

④ 指導計画(全9時間)

次	時	主な学習活動	評価規準	評価方法
一	全文を通読して、初発の感想を発表する。			
	1	○学習のねらいと流れを確かめ、初発の感想を発表する。	○エネルギー問題について関心を持ち、問題意識を持って学習に取り組もうとしている。 【関心・意欲・態度】	ワークシート 発言 観察
二	資料や具体例に注意して筆者の意見を読み取る。			
	2	○文章を序論、本論、結論に分け、筆者の意見を読み取る。	○文章の構成をとらえ、筆者の考えを読み取っている。【読む】	ワークシート 発言
	3	○図①②③の示し方に着目しながら、本論1の「説明の技」を読み取る。	○本論1の資料や具体例の示し方の工夫を読み取っている。【読む】	ワークシート 発言
	4	○図④⑤や写真に着目しながら、本論2の「説明の技」を読み取る。	○本論2の資料や具体例の示し方の工夫を読み取っている。【読む】	ワークシート 発言
三	自分の課題について調べ、情報を整理する。			
	5 6	○リーフレット作りに向けて、自分の課題を決め、資料を収集する。	○課題を決め、意欲を持って調べようとしている。【関心・意欲・態度】 ○自分の課題に沿って、必要な材料を集めている。【書く】	ワークシート 観察
	7	○複数の資料から必要な情報を読み取り、自分の考えをまとめる。	○複数の資料や情報から選んで、必要な情報を読み取っている。【読む】	ノート
四	成果をリーフレットにまとめて交流する。			
	8	○資料の示し方や具体例の挙げ方を工夫して、リーフレットを作る。	○資料の示し方や具体例の挙げ方を工夫して、自分の意見が広がるようにリーフレットをまとめている。【書く】	ワークシート リーフレット
	9	○リーフレットを互いに読み合い、良い所を見つけて伝え合う。	○学習の仕方やまとめ方、発信した自分の考えに対して、感想をまとめている。【読む】	ワークシート 発言

⑤ 本時案

a 目標 資料や具体例の示し方に着目しながら、本論1を読み取ることができる。

b 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	<p>○前時に読み取った筆者の主張を振り返らせる。</p> <p>○その主張を行うために、筆者がどのような「説明の技」を使っているかを読み取ることで、リーフレット作りに生かしていくことを確認させる。</p>	
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 本論1の「説明の技」を読み取ろう </div>		
2 本論1を3つのまとまりに分け、「説明の技1」を読み取る。	<p>○分ける根拠となる文章中の言葉に線を引かせながら、「現状」「課題」「解決策・本論2への導入」の3つのまとまりに分けさせる。</p> <p>○線を引いた言葉を発表させながら、それぞれのまとまりに書かれていることを読み取らせていく。</p> <p>○本論1で「現状」「課題」「解決策・本論2への導入」の順に説明していることが筆者の「説明の技」であることに気付かせる。</p>	
3 ⑥段落と⑦段落を比べて共通点を見付け、「説明の技2」を読み取る。	<p>○⑥段落は図①について、⑦段落は図②について書かれていることを確認させる。</p> <p>○⑥段落と⑦段落を比べて、共通点を見付けさせる。 (共通点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい内容に合った資料を選んでいる。 ・示した資料の説明をしている。 <p>○筆者が伝えたい内容に合った資料を選んだ上で、円グラフの割合や折れ線グラフの変化について説明していることが「説明の技」であることに気付かせる。</p>	<p>・本論1の資料や具体例の示し方を読み取っている。</p> <p style="text-align: right;">(ワーク・発言)</p>
4 学習を振り返り、次時の学習に見通しをもつ。	<p>○次時は、本論2の文章構成や資料の示し方に着目しながら読み進めていくことを知らせる。</p>	

⑥ 授業を振り返って

効率よく授業を進めることに心してきたが、それでも学習活動3の後半以降を次時に残してしまった。与えられた授業時数に見合った指導のあり方を、一層追究しなければならない。

ワークシート④ 本論1の「説明の技」を読み取ろう。

■ 文章構成表を参考にしながら、本論1を三つのままとりに分けよう。

① エネルギー問題の現状について、本文の言葉を使って説明しよう。

② エネルギー問題の課題を二つ書き抜こう。

③ エネルギー問題の解決策について、本文の言葉を使って説明しよう。

説明の技 □ 《文章構成》

① 図①と図②の資料の示し方を比べて、共通点を見付けよう。

② 図②の図の説明が書かれているのは() (段落)。

③ 図を通して筆者が最も言いたいことが書かれている文章を抜き出そう。

説明の技 □ 《資料の示し方》

○ 図①と図②の資料の示し方を比べて、共通点を見付けよう。

★ 今日の学習を振り返ろう。

● 本論1の「説明の技」を読み取ることができましたか。

◎ すべてできた ○ たいがいでできた △ もう少し

二つの資料が示されてある段落をよく見比べて、書き方が似ている所や同じことが書いてある所を探そう。

見付けた共通点を箇条書きでメモしよう。

の順に説明している。

作品A

作品A

① 現状みなさんは、バイオマス発電を知っていますか。バイオマス発電とは、木くずや生ゴミ、廃油、家畜の糞せつ物などを燃やして電気や熱などを作ることです。

バイオマス発電は再生可能エネルギーの一つとして開発されています。図1は、日本のバイオマス発電の設備量を示したものです。1994年当時、日本のバイオマス発電の設備量は約50万kWでしたが、2017年になると約210万kWに増えていました。1994年と比べると、およそ4倍に増えています。

この13年あまりの間に設備量が大きく増えていることが分かります。

② では現在、こうしたバイオマス発電の利用はどのように進められているのでしょうか。また、どのような課題があるのでしょうか。ここでは、岩手県のパレットストーブの利用について、具体的に取上げてみましょう。

③ パレットストーブは「木を焚く：火のある暮らし」を身近な物にしてくれる暖房器具です。岩手県では、「いわて型パレットストーブ」を開発・製品化しました。

現在、岩手県では1,100台以上のパレットストーブが家庭や公共施設等に設置されています。

④ 図2はパレットストーブを実際に使っている人の実感記です。岩手県紫波町の杉浦さんは、パレットストーブを使う人が増えると

パレットストーブを使う人が増えると環境はもっと良くなるはずですが、環境はもっとよくなるはずと書いて

私は紫波町の農村部に勤務しているのですが、町では環境型の町づくりを掲げ、木質ペレットのプラント設備などを進めています。皆様もご自身の環境のために、ぜひお買い上げください。

使ってみて感じたのは、FFストーブに比べて燃焼がすすむことです。他にもオーブンスペースで焼き物を焼くことも、他にないメリットです。薪や炭を燃やして使うよりも、木質ペレットも費用は安いですが、お金のことがかかるとは思いません。でも、暖かいです。環境も良いです。環境はもっとよくなるはずと書いています。

⑤ では、バイオマス発電を利用したパレットストーブには、どのような課題があるのでしょうか。

パレットストーブは、ペレットを燃やすため、たくさんの灰が落ちています。週に何回か灰を捨てなければならぬので手間がかかってしまいます。もう一つは、木質ペレットや、ストーブは大変費用がかかってしまいます。費用が高いと、買い求める人が減ってしまいます。

⑥ ですが、これらのことを解決する方法があります。灰を捨てる手間を省くには、大きめの容器にある程度灰をためておけば捨てる回数が減ります。

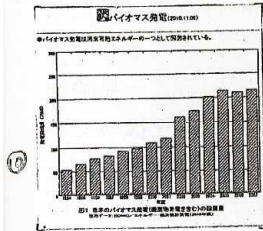
費用が求めやすい値段になるために、たくさんの方がパレットストーブを使っています。環境を良くしていければ、環境は良くなります。環境を良くしていくには、私達の行動が大切になります。

作品B

作品B

② のなまきは、バイオマス発電を知っていますか。バイオマス発電とは、風力や太陽エネルギーに比べイメージが持ちにくいと思いますが、原始時代から使われている発電方法なのです。

では、現在どのような取り組みが行われているのか、具体的に取
り上げてみましょう。



左の図1は、日本のバイオマス発電(廃棄物を含む)の設備量の移り変わりを示したグラフです。1994年から2007年の間に、発電設備量が急増しているのがわかります。1994年で約50万kWのところから2007年ではその約4倍の発電設備量になっています。

バイオマスには他にも種類があります。主に木質ペレット(木くずを囲めたもの)や木質チップといったものがあります。この13年間の間に、それらのものも利用されています。

では、バイオマス発電の課題には、どういふことがあるでしょうか。

バイオマス発電は、環境にやさしい自然エネルギーなのですが、そうだからといって、強い力を出すわけではありません。

国名	2005年度		2006年度		2007年度	
	発電量(1000kWh)	設備容量(1000kW)	発電量(1000kWh)	設備容量(1000kW)	発電量(1000kWh)	設備容量(1000kW)
日本	15	140	200	400	1300	1300
ドイツ	15	150	200	400	1300	1300
フランス	15	150	200	400	1300	1300
アメリカ	15	150	200	400	1300	1300
中国	15	150	200	400	1300	1300
インド	15	150	200	400	1300	1300
ブラジル	15	150	200	400	1300	1300
韓国	15	150	200	400	1300	1300
ロシア	15	150	200	400	1300	1300
その他	15	150	200	400	1300	1300
合計	150	1500	2000	4000	13000	13000

左の図2は、新エネルギー導入実績と見直し(原油換算万kWh)の図です。赤の囲いの

所を見てください。そこには、廃棄物発電+バイオマス発電の導入実績がかがかれています。発電エネルギーを、原油の時のエネルギーにか入してみると、2007年度の実績は、252万kWhです。あまり使えないと
②③
いうことがわかります。その他の自然エネルギーと合わせた実績が
も160kWhなのでそんなにエネルギーを出さないのです。これには先に述べたように自然エネルギーは、何回使っても元が減らないなどとい、たことが長所ですが、ある瞬間に無限の大きさの強い力を出せないのです。このように、バイオマス発電とい、た自然エネルギー
④⑤
にはこのような課題を乗り越えなければならぬのです。

バイオマス発電の実現には、多くの人が自然エネルギーに切りかえ、いろいろな発電方式に工夫を積み重ねることが必要です。いろいろな発電に工夫というのは、どうやら、発電方式がもっと強い力を出せるかを考え、実現することです。ですが、私たちはできない
⑥⑦
ことです。考えることには長い年月が必要ですし、実現するには、
⑧⑨
そう大なお金が必要です。この課題はやはり、むずかしい問題です。
⑩⑪
ですが、私たちに出来ることをやってみるのは、どうでしょう。少し
⑫⑬
ずつでもいいので、バイオマス発電などとい、た自然エネルギー
⑭⑮
に変える環境にもいいし、環境にもいいということは、地球にも
⑯⑰
いい動きだと思えます。そうすることで車も変わ、ていくんじや
ないでしょうか。それに太陽エネルギーや風のエネルギーとちが、
⑱⑲
てバイオマスなら天候や季節に左右されないということ(言えは、
⑳㉑
優れものです。これから、自然エネルギーを使うことが必要です。㉒

⑦ 四次のリーフレットを検証軸に

本単元の中心課題は、調べたことをもとにして、資料や情報を活用してリーフレットにまとめることであった。子どもたちが作成したリーフレットをもとに、これまでの取り組みを検証したい。評価規準に照らしてA評価のリーフレットが5点、B評価が3点、C評価が2点あった。C評価2点の内1つは作文力そのものに難があり、他の1つは論理展開に沿った資料の活用ができていなかった。

作品Aは、1行目・話題提示、4行目・現状、12行目・具体的な取り組み、31行目・課題、38行目・解決策、43行目・主張というように、教材文と同様の文章構成になっている。「説明の技1」を自分のものになっている。

「図1」を使って「説明の技2」を検証してみよう。バイオマス発電の増加を示すにふさわしい資料を選んでる。5行目で何の資料かを示し、次に具体的な数字を示し、最後にマクロな変化を読み取ることで資料から分かることを記述している。「説明の技2」も十分に使いこなしている。

文章の論理展開はどうだろうか。話題提示から現状までは「バイオマス発電」について述べている。ところが、具体的な取り組み以降はペレットストーブが取り上げられている。正しくは「バイオマスエネルギー」または「バイオマス熱利用」として論を進めるべきだと思うが、子どもにとって耳慣れない話題ゆえ、こ

の程度の混乱は許容されるべきだろう。その点を除けば、取り組みから出てきた課題を2点挙げ、それぞれに対する解決策を述べ、最後は「私達の行動が大切にな」と結論づけている。

作品Bは、1行目・話題提示、4行目・現状、16行目・課題、32行目・解決策及び主張という文章構成になっている。解決策と主張が同一段落に書かれているが、「説明の技1」は自分のものにしてしている。図1・図2の資料については、選び方示し方ともに「説明の技2」を使いこなしている。

作品Bの課題は、解決策以降の論理展開にある。35行目で「(出力を上げるための発電方法の工夫は)私たちにはできないこと」と述べながら、38行目で「私たちに出来ること」として「自然エネルギーに変える」ことを提案している。そして、「これから、自然エネルギーを使うことが必要です」と結論づけている。一見論理矛盾のようであるが、実は大人社会が有効な解決策を持っていない問題を扱っている。分からないことは分からないと論じるべきであった。

以上、子どもたちは目標を概ね達成し、6年間で育てたい力を身につけてきている。C評価の子への個別指導、調べ学習における個別支援等の課題を残しつつも、取り組みの方向性については確かな手応えを感じている。

■ 2012年度 ■

4年の実践

だれもが「わかる・できる」授業の鍵は「論理」

4年担任 草尾佳秀

1 はじめに

どの子にも確かな読解力をつけたい。「確かな読解力」とは、論理的に読み取る力のことだ。そのためには、「論理」を授業の目標にし、一人ひとりの教師が「論理的な読み方」を教える手立てを自らのものにしなければならない。

「どの子にも」と言うは易いが、できる子の発言に依拠しない授業というのはなかなか難しい。具体的には、論理を授業の目標にした上で、「焦点化」「視覚化」「共有化」という3つの要件で授業をデザインすることになる。「授業を焦点化(シンプルにする)」とは、ねらいや活動を絞ることである。「授業を視覚化(ビジュアルにする)」とは、視覚的な理解を重視した授業にすることである。「授業を共有化(シェア)する」とは、話し合いを組織することである。――筑波大附小の桂聖さんたちの授業のユニバーサルデザイン研究に学びながら、小さな一歩を踏み

出したばかりである。

2 具体的な取り組み

(1) 国語科「ありの行列」 ――「論理」をめざす授業の一里塚として

―略―

(2) 校内研究授業

① 単元名 暮らしの中の世界について調べよう

教材名 「暮らしの中の和と洋」(東京書籍 小学校4年下)

② 目標

○まとまりごとの内容をおさえて、何をどのように比べているかを考えながら読み取る。【読むこと】

○暮らしの中の「和」と「洋」について、調べたことを文章にまとめる。【書くこと】

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書くこと	読むこと	言語事項
○暮らしの中の文化に関心を持って読み、進んで資料を探して調べたり、『『暮らしの中の和と洋』ブック』を作ったりしようとしている。	○身の回りの「和」と「洋」について調べ、それらを比べて文章に書く事柄を集めている。 〈(1)ア〉 ○書く事柄を整理し、まとまりに気をつけて文章を書いている。 〈(1)イ(2)ウ〉	○段落ごとに書かれている内容をとらえ、対比されている事柄に注意して読み取っている。〈(1)イ〉 ○課題に応じて内容をまとめるために、文章の必要な部分を要約したり引用したりしている。〈(1)エ〉	

③ 指導について

○ 本単元では、暮らしの中の日本の文化と外国の文化について、いろいろな本や資料で調べる活動を通して、文章から必要な情報を読み取る力と2つのものを比べて書く力をつけることをねらいとしている。

教材文は、児童が気づきにくい「和」と「洋」の違いやそれぞれの良さを対比して分かりやすく説明している。この文章構成に気付き、目的をもって、「住」の「和」と「洋」それぞれの良さを読み取る力を身につけさせたい。教材文から児童の視野を広げ、この後の「衣」や「食」について調べようという意欲につなげることが期待できる。本教材では、児童自身が自分の決めた「和と洋」について調べ、『『暮らしの中の和と

洋』ブック」を作るという目的のために、複数の本や資料から必要な情報を読み取り、文章を引用したり要約したりする活動を設定している。

○ 1学期の説明文教材「ヤドカリとイソギンチャク」では、段落の結び付き(三段構成)や段落ごとの要点に焦点を当てて学習した。また、6月には「ありの行列」(光村図書、3年)を用いて、意味段落の要点をまとめたり全文を要約したりする学習をしてきた。それらを通して、子どもたちは読みの基本的なスキルは身につけている。しかし、日常の学習においては、初読の文章では読みがくだらない子が半数を占め、また既習内容の定着率も高いとは言えない。こうした実態から、1学期の学習内容を確認する活動を組み入れつつ、対比という新しい技法を習得させていく必要があると考える。

○ 本単元では、「読みながら書く力」「書きながら読む力」を育てるために、次の具体的な内容を指導する。

・和室と洋室の良さを取り入れて生活していることを読み取る。【
内容の理解】

・「話題」に対して「問い」と「答え」があることを理解する。
【述べ方の理解】

・分かりやすくするための段落相互の関係と文章構成を理解する。
【述べ方の理解】

・対比して和と洋について記述した筆者の意図を解釈する。
【筆者の意図の理解】

・和と洋について対比を意識して読む、書く。
【対比して読む・書く力の活用】

指導にあたっては、子どもが目的を持ち「対比して読む・書く力」を身につけることができるように次の4点を重視する。

◆ポイント1◆読む活動と書く活動とが関連するように仕組む

説明文を読む力は、内容ばかりでなく筆者が説明するための方法や論理、述べ方を読み取ることが重要である。子どもの身近な和と洋について想起できるようにし、『『くらしの中の和と洋』ブック』を作るという目的を持てるようにすることで、説明されている内容だけでなく表現方法に目を向けることができるようにする。

◆ポイント2◆文章構成や述べ方の工夫に気づくように仕組む

文章構成や述べ方に目を向けるようにするためには、その工夫が見えるようにする活動がポイントになる。そこで、形式段落レベルで「和室」「洋室」について書かれている文や段落を色分け(赤青の線引き)する。色分けできなかった「和室と洋室の両方が書かれている」ある

いは「まとめ」等の段落の役割を検討し話し合うことで、文章構成や対比した述べ方の工夫を意識しながら読むことができるようにする。

◆ポイント3◆書くための表現技法を活用させる

分かりやすく説明するために用いた表現技法、対比して述べるとき、順序を述べるとき、まとめて述べるとき、問いかけのときの表現技法と、その表現を使った段落や文のつながり方を明らかにし、説明文を書くときに活用できるようにする。

◆ポイント4◆『くらしの中の和と洋』ブックを読み合い、良さを発表させる

子ども同士が説明文を読み合い、和と洋の違いや良さを話し合うようにする。『くらしの中の和と洋』ブックを読み合うことを通して、「対比して読む・書く力」の活用の定着を図る。

④ 指導計画(全11時間)

次	時	主な学習活動	評価規準	評価方法
一	学習の見通しを持つ。			
	1	○学習のねらいと流れを確かめ、初発の感想を発表する。 ○『くらしの中の和と洋』ブックを作る学習計画を立てる。	○生活の中の「和」と「洋」について関心をもち、意欲的に学習活動に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】	発言 ノート
二	何をどのように比べているかに気をつけて、内容を読み取り書き方を学ぶ。			
	2	○文章構成をとらえる。	○文章の構成をとらえている。【読む】	ノート 発言
	3	○序論と結論の関連を読む。	○「問い」と「まとめ」の関連と書き方の工夫を読み取っている。【読む】	ノート 発言
	4	○本論Ⅰを読み取り、書き方を学ぶ。	○和室と洋室の最も大きな違いを対比に気をつけて読み取っている。【読む】	ノート 発言
	5 本 時	○本論Ⅱを読み取り、書き方を学ぶ。	○すごし方のそれぞれの良さを対比に気をつけて読み取っている。【読む】	ノート 発言
	6	○本論Ⅲを読み取り、書き方を学ぶ。	○使い方の面でのそれぞれの良さを対比に気をつけて読み取っている。【読む】	ノート 発言
三	和と洋について調べ、文章にまとめる。			
	7	○自分たちの生活の中にある「和」と「洋」を探し、調べたいものを選ぶ。	○文章を書くために、身の回りの生活の中から「和」と「洋」を対比して考えることができるものを探し、選んでいる。【書く】	ノート
	8	○自分が選んだ課題について資料で調べ、	○自分の課題を解決するために資料を進んで	ノート

	必要な情報を集める。	読み、必要な情報を集めている。【読む】	観察
9 10	○メモをもとに、自分が調べた「和」と「洋」について文章にまとめる。	○必要な情報を引用したり要約したりしている。【読む】 ○まとまりを意識して事柄を整理し、順序を表す言葉や比べるときの言葉を使って文章を書いている。【書く】	ノート
四 『くらしの中の和と洋』ブックを読み合う。			
11	○『くらしの中の和と洋』ブックを読み合い、学習のまとめをする。	○『くらしの中の和と洋』ブックを読み合い、学習したことを確かめて、今後の学習活動に生かそうとしている。【関心・意欲・態度】	発言 観察


⑤ 本時案

a 目標 すごし方のそれぞれの良さを対比に気をつけて読み取ることができる。

b 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	○前時に学習した「対比」について振り返らせる。	
和室と洋室のすごし方の良さを対比に気をつけて読み取ろう		
2 「和室」と「洋室」のすごし方の良さについて書かれているところに傍線を引きながら、本論Ⅱを読む。	○本時の学習部分をペアで役割音読させる。 ○「和」について書かれている部分に赤線、「洋」について書かれている部分に青線を引かせる。 ○最初に一人学習を行い、続いてペアで話し合いながら確認を行う。	
3 各段落の関係と役割を考える。	○教材文を黒板に掲示し、「和」と「洋」部分に線引きする。 ○④段落と⑥段落とが線引きされなかったことを確認し、④段落と⑤段落の関係と⑤段落の役割を話し合う。 【④段落】 ・1つ目の話題提示をしている。 【⑤段落】 ・④段落を受けて、部屋で過ごすときを具体的にしている。 ・和室と洋室を対比している。	
4 対比することの良さを話し	○⑥段落が「問い」の段落、⑦～⑩段落が「答え」の段落になっていることを確認する。	



<p>合う。</p> 	<p>○対比するとどんな良さがあるのか、書き方を工夫することから見付けさせる。</p> <p>【見つける手順】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員起立をして、1つ見つけたら着席する。 ・ノートに書く。 ・ペアで話し合う。 ・全体で確認する。 <p>【書き方の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和室と洋室について書いた段落を分けている。 ・段落で和室と洋室を対比すると、それぞれの違いや良さが読む人に分かりやすくなる。 ・段落でも、一文目は良さ、二文目からは具体例を書いている。 <p>○説明文を書く際に使う「それに対して」のような対比する方法や、段落と段落の関係を整理して確認する。</p>	<p>・対比する時の書き方の工夫を見つけることができる。</p> <p>(ノート・発言)</p>
<p>5 説明文を書く時に使う表現技法を整理する。</p>		

⑥ 授業を振り返って

今回は、「問いの文を見つけよう」式のオーソドックスな授業展開にせず、作業を出発点にして文章構成や記述の工夫を発見させていく展開を試してみた。第三次の活動に生かす布石でもあったのだが、子どもたちには少々敷居が高かったようだ。学習活動2までに想定以上の時間を要し、結果的に、メインにするはずだった学習活動4が窮屈になった。次時にやり残し部分の授業をしたが、13分かかった。子どもの実態と授業展開が合致していなかったことになり、授業を組み立てていく上での反省点である。

事後の協議では、次のような感想や意見をいただいた。

- 授業のねらいが明確であった。個人→グループ→全体という流れができています。
- 文に線を引かせるなどの作業で力が確実に付く。教材文を紙に書いて掲示しているのが良い。
- 発問や指示が分かり易い。
- ペア学習の様子がよく分かった。
- ノート指導がしっかりされている。
- 「工夫を見つけて言語化する」ということを低学年から練習する必要があるが、授業の中で言語化する方法をY児やS児に教えていた。

3 終わりに

今後の課題として、次の諸点が挙げられる。

- 読解の基礎基本を教師間で共有し、系統的に指導・定着させること。
- 論理的文章を読むスキルをきちんと定着させること。
- 授業のユニバーサルデザイン化を進めること。
- 4～6という少人数の中で、子ども同士が切磋琢磨して成長していける授業を創造すること。